羊水花

森内俊雄

水花

森内俊雄

集英社

羊水花（ようすいか）

一九七六年一一月一〇日　初版印刷
一九七六年一一月二〇日　初版発行

著　者　森内俊雄

発行者　堀内末男

発行所　株式会社集英社
〒101東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ一〇
電話　二三〇—六三六一（編集）
二三〇—六一七一（販売）

印刷所　株式会社常磐印刷所
株式会社美松堂印刷所

定　価　八八〇円

©1976 T. Moriuchi, Printed in Japan 0093-772063-3041

目次

羊水花　5
螢　47
黒い蝶　75
猫　85
爪　119
丘の上　145
声の網　173
瓶の顔　215

装画　德本立憲

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

羊水花

羊水花

いつ、何が、どう見えているのか、ということは、人それぞれの気儘勝手というものだが、わたしには世間が常に崩れ積みの石垣に思える。危うくあって、その実、考え尽され編み出された強固な防ぎの構えである。

それを充分に承知で、時々さまを変えて言われる石垣への言葉の数々は、見る人の軀の脆さ、軽さが思われてむごいことと感じられる。自分も崩れ積みの石垣のひとつとなって、押し黙ってこらえているのなら兎も角、何ごとかを通りすがりに言ってみるだけの人が、とてもうとましい。わたしはと言えば、石垣のそばの道すがら、眼をそむけはしないが、息を殺して歩くほうの人間に属しているはずだった。

ところが不幸なことに、このごろ、ひとりごとを言う癖がついた。他の人ならば虚空に向って呟くことを、石垣に向けて言っている。すくなくとも言っているつもりでいる。いったい、なんのためだろう。何の役に立つのだろうか。聞き届けてもらうことを期待してはいない。しかし、

いさぎよい気持の影が微塵も無いのは、やはり何かを依り頼みあてにしているせいなのだろう。それにしても、たとえばせめて石垣からこぼれ落ちた石くれなら、考え込むに人を立ち停まらせ、躓かせ、時に用い方によれば、人をあやめることさえも出来るだろう。石でなくとも、一本の釘であってもいい。棟木に打ちこまれ、そこで錆び、朽ちるたった一本がもとで、すべてが大きく崩れてゆく釘であるならば、また新たに建つものもあろうと思うが、もとよりこれは夢想にしか過ぎない。

そもそもわたしは使いを頼まれて、しかと覚えたはずの用件を忘れ、ただただ道筋を急いでいる子供に似ている。使いの目的はおろか、使いを頼んだ人の顔も忘れた。しかもこの子供は、はや四十年も歩いてきたのである。そして立ち停ったところは、三日ほど前、会社の仕事で出かけた屋敷町にある坂道のくだりで、傘を持ち変えながらあげた顔の先に丁度、崩れ積みの石垣があった。その日も雨が降っていて、あらためて数えてみると、これで今日まで、まる七日間降り続けている。

梅雨にはいって、屋敷の庭で開け放たれたフレームや温室の窓から流れ出た濃い温気のようなものが、そのまま町の空気になった。ビニールに覆われたような空の色である。レインコートを着込んだ軀の内側にも同じ色合いがある。この季節、日の光が足りず植物の体が弱って、花びらや葉にボトリチス病やウドンコ病が多発するのだそうだが、それはいまの自分の軀そのものであるように思える。坂道のくだりで石垣を見てから、ことにそう思えてきた。その思いが溜り澱んできて、今朝、会社に出かけるまえに家の縁の下を覗いてみた。すると案の定、春に咲いたスイ

センとフリージアの球根が腐っている。地温が高くなれば根の成長が停まり、そのままではやがて腐れてゆく植物もある。春咲きの球根類は、葉が黄色く変色しはじめたら根の収穫期で、なるべく晴れ間続きの日に掘り上げて日蔭で乾かし、涼しく暗いところに保管するものと教えられていたのに、時期を逸していて、雨の日につい急いで掘り取ったのがいけなかったのだろう。わたしのような人間は、花などは見るだけで、棲み家の庭に自分で植えるものではないと思い知らされた。

出勤を急ぐにもかかわらず縁先でいるわたしを、妻の基恵が咎めた。

「こいつは腐ったから、捨ててくれ」

と言うのに、家の内から、

「どうせだから、そのままでもいいわよ」

と答えた。家も生きているなら、この雨期には根腐れもするだろう。ここは暮らしの腐れものが互いに睦み合う場所だと、肩を雨に濡らしているわたしには聞こえた。朝なのに暮れ方の暗さである。その暗さが、会社に急ぐべき気持をゆるめてしまっていた。庭に置いた水色のポリバケツの中で稲苗が植っている。小学校五年生になる子供の高義が、理科の教材のひとつに学校から持ち帰って、籾から育てているものである。容器のせいか、それともえらんだ泥質のおとろえからか、背丈は伸びないでいるが、稲の青緑の細い葉は一杯に溢れた水の中で根離れもせず、真直ぐに立っていた。降っている雨に激しさが感じられないでいながら、雨にはその稲の葉より太く逞しい粘りがある。まるで重い柳の葉蔭に包まれているようだ。それでついで思い出したことが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ある。

わたしは長いあいだ、柳暗花明とは、この梅雨の季節を飾って指す言葉だとばかり思っていた。この季節、柳の葉のような暗い雨が降りながら、実は花の明るい時期でもある。ざっと思い浮かぶままにあげていってみても、キンセンカ、セキチク、キンギョソウ、ホウセンカ、ハナショウブ、スイレン、アヤメ、カキツバタ、ツキミソウ、サミダレシオン、テッポウユリ、ザクロ、クチナシ、タイサンボクといった花が、わたしの雨色の闇に塗りこめられた想像のうちに、ひときわ美しく咲いている。まだまだあるはずである。しかし、柳暗花明とは最早過ぎた春の景色のことで、また転じて自分には縁遠い色町のことを言うのだと知って、わたしの落胆は甚だしいものだった。梅雨寒の日はあるにしても、おおむね、気温の上昇期に図に乗って、繁茂する植物たちの息苦しく陰険な殺気に似た気配と、降り続く雨で膚も気持も暗く湿ってほとびる日々に、わたしを内から照り乾かす言葉の花の香りが失せたかに思っている。十数年、棲んでいる佐江町も花に乏しい界隈だし、これから会社に出かける路筋はもとより、社屋がある都心の升形町も同じである。切り花、活け花にわたしは心が動かない。ごく自然に眼が届き、覗いた垣根のうちの庭で咲いている花のほうが好ましい。雨期の昼間の闇を照らす街灯のようなタイサンボクの花もよければ、葉蔭と庭土の暗がりで、明るいわりに心もとないロウソクの焔のようなツキミソウもいいものだ。

駅に歩きながら今朝、わたしはこれまでのどの日より滅入っている。魚を飼う水槽の中に植えられた水草があまりに濃く茂れば、魚は死ぬ。十歳の子供の高義ですら知っていることだが、光

がなければ、水草は日常の呼吸作用は営むものの炭酸同化作用が停まり、魚に恵むべき酸素が乏しくなる。いまの季節、ことに今朝、この町中はそんな水槽と化している。青黒い水草の雨をかきわけて、佐江駅に泳ぎながら息絶えて、死ぬかと思える。わたしは光を望んでいるが、空は雲に覆われ、さらに頭上に黒い傘の拡がりがある。

大通りに出ると、歩道と車道の境が雨で川になっている。人も大勢、川にそって駅のほうに流されていた。魚を数多く水槽の中で飼えば、互いに特殊なイオンを水中に出しあって、かえって大概な病害、困難な状態を中和するそうだが、わたしは魚ではない。それに傘を畳んで乗り込んだ混み合う電車の中でいる人たちも、わたしには魚に見えず、炭酸同化を止めた植物、青白い樹のごときものに見える。雨で車窓が閉ざされて走る水槽の酸素が乏しい。わたしもまた虚弱な植物のような人間だが、これではいずれともに腐れてゆきそうだ。口の中がひどく苦い。レインコートのポケットを探って、携帯用の小さな罐を出した。ドロップが二種類はいっている。ひとつはアジサイ色で、かたちはピラニアに近い仲間だがおとなしい草食性の熱帯魚メティニスに似ている。もうひとつは尾鰭の部分の色が、体全体にそのまま染め上った透きとおるような薄い赤である。こちらは甘味が強く、さきのほうは酸味が勝っている。迷わずアジサイ色をえらんで、苦く渇いた舌に載せた。傍目にはドロップだが、これは飴ではない。薬である。噛みくだいた口で溶けたものが喉を過ぎ、淡く盛り上った水色の花を、ぱっと咲かせた。人いきれの電車の外で降っている生温かく粘い雨と違って、涼しく眼の醒める冷たい水が、こんこんと花から湧くようだ。

かなり知られた出版社である勤め先でのわたしの仕事は、この春以来部署を移って、十二、三

歳から十八歳の少年少女を読者にする雑誌編集の係になった。会社に勤めて十八年になるが、このあいだに四つの雑誌編集部を転任している。雑誌が新しく創刊されるたびにポストを移って、軌道に乗れば編集責任の席を人にゆずるふうな恰好で過ごしてきた。今度、五つ目の雑誌である。わたしがいま口に含んだドロップに見える薬は、ティーン・エイジャー向けの劇画連載を、一年にわたる約束で頼んだ画家からもらった。彼はまだ三十そこそこの青年だが、四人の仲間と組んで工房をつくっている。

わたしの疲れた顔色を如才なくうかがった彼が、

「安住さん、こんなものをご存じですか」

と言った。ひと眼見て分かるものを、知っているかと訊ねるからには、何か奇なるものであるに違いないと思ったが、黙って彼のレタス・グリーンのカラーシャツに眼をあてていた。青年は自分の劇画工房の名前が飾り模様になっている、同色の大型外車を乗りまわしている。ドロップをつまんだ手の指に、アメジストの指輪がはまっていた。

「いや、別に気を持たせるほどのものではありません。でも、洒落ているでしょう？　青いのが覚醒剤で、赤が睡眠薬ですよ」

それで、わたしはそうか成程と納得した。話をする彼の口に匂うものがある。人との面会の礼儀に口臭防止の錠剤を含んでいるものとばかり思っていた正体が分った。青年は日中、ずっとアジサイ色のドロップを舐めているのだ。

「ああ、これなら知っている」

とわたしは青いドロップを掌に載せて答えた。
「ほんとですか。不良外人にわたりをつけて流してもらっているものですけれど、ごく最近のものですよ」
彼にとっては、わたしはすでに老人である。若い者に調子を合わせていると、受け取ったのかもしれない。疑わしく眺められて、つい言わずとも済んだことを話す羽目になった。そのドロップは、この国で三十年もの昔につくられている。戦争末期のことである。むざむざ命を捨てさせられる兵士たちに慰問のかたちであたえて、不安や恐怖を消すために研究開発されていた狂気の菓子である。果して実用に供されたかどうか知らないが、わたしの父が当時、軍の研究室にいた。多分、ヒロポンや向精神薬より薬効の強いものだったのだろう。敗戦になって、父は自分がつくったドロップを、わずか二十粒嚙んだだけで自殺している。母は翌年あとを追うように死んだ。父の死に挫けて軀の衰弱からの病死である。そのあとわたしは伯父に引きとられて育ったが、化学の知識に欠けている自分には、睡眠薬ではなく覚醒の薬を嚥んで、ついの深い眠りに踏みこんで行けた父がいまだに不思議で、かなしいと思う。
「安住さん、ゆるしてください。悪いものをお見せしましたね」
青年が顔を伏せたから、
「いいさ。呉れるというのなら有難く頂戴するよ。おやじが舐めたものを味わってもみたい」
と言った。
「そうですか。無くなればいつでも持ってきます。あのときもこのときも悪い時代だと思われて

いるのでしょう」

「おや、時代？　きみの言うその時代って何だね」

おそらくわたしは薄気味の悪い微笑を浮かべていたのに違いない。彼は突然、普段の自分に立ち返って、次号に続く劇画のストーリーのあらましを告げ、わたしの意見を要領よく訊き出す仕事の青年になった。わたしが青年を深追いしなかったのは、そのとき早や口に含んで溶けたものが、効いてきたせいだ。彼が寄越したドロップ一粒の効果は、ほかに食物、飲み物を摂らなければ三時間から四時間、持続するようだった。今日まで三カ月以上連用しているが、いまのところ、これといった副作用は無い。

会社に着いて編集室に上ってゆくと、来客があって、わたしは待たれていた。この種類の雑誌では欠かせないカウンセリング・コーナーの解答者、テトラ&ポール氏である。本職は産婦人科の開業医で、わたしより二つ歳下だが、恰幅がよくて老けて見える。応対の横柄、無造作な態度は、訪ねてくる患者が剝き出して見せざるを得ないテトラ、羞恥の部分を隠してやるために、いっときの気休めに投げあたえる肌ざわりの粗いタオルのようなもので、それは彼生来の性格ではない。膿みただれた花びらの投書の中には、わたしばかりでなく、彼をしてもうんざりさせるものがある。少女姦の趣味に溺れている中年の男が読者にいて、べとつく脂汚れの夢想を託したかに見えるが、字はあきらかにいとけない年齢の少女の手である。わたしは人の見かけにしばしば騙されることはあっても、職業柄、手紙の文章と字には決してあざむかれはしない。返してもらった投書の束と、解答の原稿を間においてわたしは一時間ほど彼、テトラ&ポール氏と雑談を

した。出勤の途上で嚙んだドロップのアジサイ花が、おとろえず活々と咲いていたから、わたしばかりが爽やかな気持でいる。

彼はといえば、煙草を次々に吸い継ぎながらわたしを自分の患者扱いにして、けむりのタオルで包んでいた。彼はわたしを羞恥の部分と考えている。わたしばかりでなく、職業のならいから人間をすべて恥部と見ている。そんな彼が、わたしは嫌いではない。加えてここ七日間降り続く雨が彼にも及んで、見るもの聞こえるもの触れるものが、一層そのように感じられているのかもしれない。それでも彼は有能な医師なのだろう。彼が人に向けて差し出す肌ざわりの粗いタオルは、この雨期にもかかわらず、こころよく乾いている。話題は仕事のかかわりを避けて、たまたま互いに一致している魚への興味に向いていた。

彼は熱帯魚を飼っている。胎生、卵生メダカ科の種類が関心の的で、プラティー、ソードテール、セルフィン・モーリー、フラッグ・フィッシュ、ランプ・アイなども好みのうちだが、俗にグッピーで始まり、グッピーに終わるきまりの轍を踏んでいた。普通種のグッピーのほかに、レース、ファンテール、ベルテール、シングルとダブルのソード・グッピーを飼育している。わたしなどは、彼にくらべればまったくの素人で、しかも花と同じく、自分では飼わずに眺めるだけのほうだった。もっとも見るだけにしては、並みの人より激しく強い関心がある。魚も自然のままを眺めたいものだが、熱帯魚とあればそれはかなわない。花にたとえるなら彼女たちもまた、人の手にかかった水中の切り花、活け花のたぐいではないかとそしられるだろうが、あたってはいない。人工の水槽の中にしても、自在に生きて育っている。かならず、しおれ枯れて、捨てら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com